

キャリアガイダンスにおける VPI 職業興味検査の活用

興味領域尺度が低位のプロフィールを示した高校3年A君の事例

スクールカウンセラー 山田弘美

1 経緯

保健室に胃部不快感を訴えて来室したことがきっかけで、A君の声優志望の悩みがわかり、養護教諭が相談室のカウンセラーにリファー。A君との5回の面接（第3回にVPIを個別式で実施）および保護者と担任・カウンセラーとの面接（第4回）を経て、進路実現に至り短期で終結。

2 概要

- ① クライアント：高校3年生 男子(18)
- ② 主訴：父親に希望の進路について伝えられない。
- ③ 家族構成：父(58)、母(55)、兄(20)
- ④ 成育歴及びキャリア歴

企業を経営する父、専業主婦の母、有名大学に通う兄との4人家族。末っ子として育ち、地元の小中学校に通う。入学した高校は第一希望ではなかったが、高校生活ではのんびりと過ごし、3年次1学期まで落ち着いた生活態度であった。学校生活では担任との信頼関係は築けていないまま、3年次のクラスでは大学への一般受験組が少なく、就職・推薦入学で進路決定す

る者が多い状況であった。

⑤ 相談の経緯

高校3年生の11月、保健室に胃部不快感・不眠を訴えて自ら来室。保健室で休養後、教室に戻る際に養護教諭から『3年生なのだから進路などの悩みがない人なんていないよね』と言われたことがきっかけとなり、A君の声優志望の悩みが語られた。本人の希望で養護教諭が相談室のカウンセラーに連絡、面接となった。

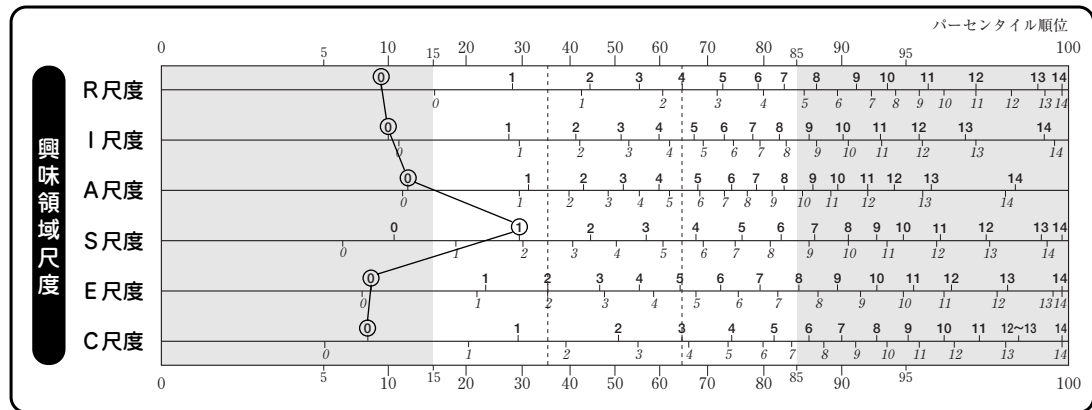
⑥ 見立て

父親との葛藤を抱え、その陰性感情が男性担任教師にも投影、不信感が募っていた。しかも3年11月の時点で進路が未決定であることの焦燥感と、高校生活への後悔で、不安定な心理状態であったため、父親に論理的な志望理由を説明し説得する自信がなくなり、ストレスが身体症状として現れた。パーソナリティは、控えめで自己統制力は強く礼儀正しいが、主観的な傾向で感受性が鋭い面に加え、自己肯定感の低い傾向が見られた。

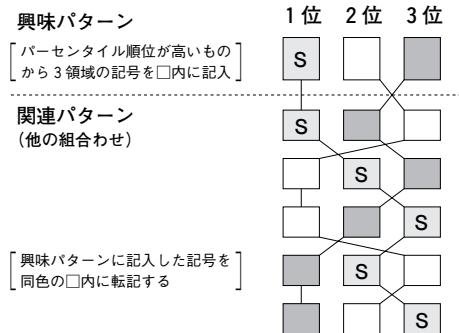
⑦ 心理検査の結果

◆ 興味領域尺度プロフィールの得点は極端に低く（RIAEC尺度粗点0、S尺度粗点1）、選択した項目のほとんどがNである。このことは希望進路が決定しており職業興味に限られていること、意志の強い

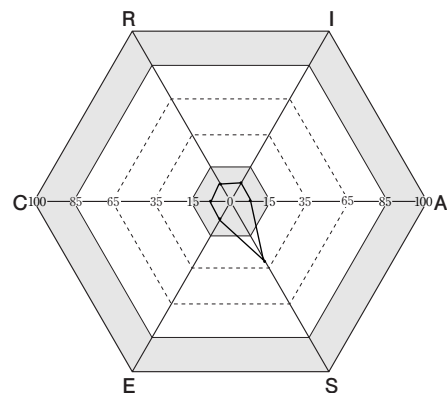
■興味領域尺度プロフィール



■興味パターン

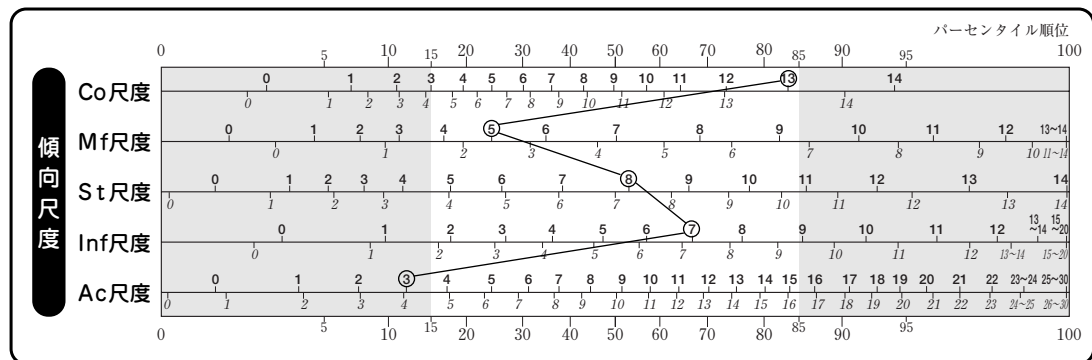


■興味の六角形



[各領域のパーセンタイル順位をグラフ内に記入し、線で結ぶ]

■傾向尺度プロフィール



ことを示している。面接の中で、受験直前まで父親に言い出せず、この希望進路を否定されることへの不安が語られたことはAc尺度の低さ（粗点3、12パーセンタイル）やCo尺度の高さ（粗点13、84パーセンタイル）とも一致する（St尺度粗点8、Mf尺度粗点5）。

- ◆ 検査用紙の「Y」選択項目は、4シナリオライター・18タレント・29幼稚園教員・35犯罪心理学者・50小説家・87オートバイ・レーサー・124カウンセ

ラー・149保育士の8項目を選択。このホランドコードの頻度はS尺度8・A尺度7・E尺度3・I尺度3・C尺度2・R尺度1であった。

- ◆ ワークシートの「⑩希望する職業等の職業コード」では心理学研究者・通訳・俳優・保育士・カウンセラー・声楽家の6項目を選択。ホランドコードの頻度はS尺度6・A尺度6・E尺度4・I尺度3・C尺度1・R尺度0であった。

上記の2つの優位なホランドコードから考えると、

希望進路である声優（ホランドコードAES）は納得がいく。

3 面接の過程

① 第1期「父親との葛藤」（第1回～第2回）

父親への不満を口にはするが、反発の裏側には父への承認欲求があり、一面では父親にかなわないと感じていた。兄は父親の望む進路を選択したが、A君は声優育成の専門学校進学希望である。説得できずにいるので父親は大学進学を勧めること、担任の指導力への批判などを話す。しかし、大学への進学は自分を甘やかすことになると考え、専門学校への体験入学も参加し、行きたい気持ちが高まっていた。この面接において両親や兄弟との葛藤も言語化でき、本人の希望進路への意志が強いものの、助言を進んで聞く様子が見られたため第3回目の面接においてVPI職業興味検査を実施することを提案。一度広く選択肢を広げ、検査のプロセスと結果から考察しようと提案し承諾を得た。

② 第2期「自己のテーマを発見」（第3回）

大学・短期大学在学生を標準化したこの検査を高校生に実施。職業名を目にし、事実に沿って考えるという客観性のある自我状態に働きかけるを試みる。実施時間は約15分、その後、A君とカウンセラーでプロフィールを描き、ワークシートへの記入・フィードバックを行った。Y選択職業のホランドコードを分析することにより、職業興味は社会的興味・芸術的興味が優位で一貫性があることを伝え、A君は安心した表情をみせた。さらに「言葉と子どもというテーマも見えてきそうな感じは？」の問いかけで、自ら「子ども好きだからやりたかったんだよ、声優は！」と志望理由の再発見ができ心から納得していた。しかし、自ら一人で父親に伝える自信がなく、三者面談が終了していないこともあって、A君の希望で担任と父親およびカウンセラーが話し合うこととした。

③ 第3期「父親像の転換と将来の展望」（第4回～第6回）

担任が父親と相談室に来室。父親は、A君に対する思いを語る。父親がただ反対しているのだと担任が誤解していたことを謝罪すると、父親と担任は意気投合。父親は「父親と自分は違うという気弱で自信のないA君」に寂しさといらだちを感じる一方で、何とか接し

たいと誘っていた。父親はA君の抱く父親像とのすれ違いを認識し、本人の希望を重視することを承諾。ところがこの父親との面接中、父親の一方的な態度が心配で、A君は保健室前に待機していた。養護教諭より連絡を受け、その場で面接。

面接の経過を話す中で「父親としての思いがあり反対していた」こと、担任と父親が意気投合したことなどを伝え、A君は安心した表情となり、自分で父親を説得すると力強く約束、下校した。

その後第一希望の専門学校に合格し、父親ともうまういっているが、声優として学んだら、将来の安定のことも考え、保育士の資格を取ると決意。そして卒業式の日、晴れ晴れとした表情のA君は別れの挨拶をしていった。

4 考察と課題

相談室に自ら来室する生徒のほとんどは、VPI検査の項目（124カウンセラー）Yへ○を付ける。A君もまた○を付けていた。そんなときは気が引き締まる思いである。

この事例ではVPIの結果はそのままでは利用できなかった。もし結果から得られたプロフィールだけに注目したならば、さらに、自己肯定感を下げたことになるだろう。また、担任とは異なり、カウンセラーは日頃接しているわけではないので、このVPIから得られる情報と目の前にいる彼をつなぎ合わせることの大切さをあらためて実感した。

そして父親との葛藤を克服したA君は、さらに職業理解を客観的にを行い、保育士という具体的な目標を見つけていた。検査用紙にもワークシートにも保育士は選択されているので、すでに彼の進路は決まっていたのかもしれない。

この事例もそうだが、相談のきっかけは養護教諭の発達という視点と生徒との信頼関係が功を奏す。だからこそ彼は、養護教諭に信頼を置き、何度も保健室に足を運んでいる。駆け込み寺的存在の保健室は、生徒の情報源だ。担任の先生にもご協力いただいた。学校というシステムの中でその機能をうまく利用しながら生徒への支援をこれからも考えていきたい。